

比較家族史学会第12回研究大会

昭和62年11月14日（土）・15日（日）の両日、愛知県の日本福祉大学において比較家族史学会（会長：永原慶二）第12回研究大会が開催された。

大会第1日目には、まず、公開講演「日本家族の源流をたずねて」（江守五夫）が行われ、ひきつづき、今年度のテーマである「〈老い〉の比較家族史」について、「人口学からみた老人」（伊藤達也）、「文化人類学からみた老人」（片多順）、「中国人の老人観」（浅井敦）、「韓国家族における老人」（竹田旦）、「ウィーン下町における老人生活」（依田精一）、「ソ連の老親扶養」（稲子宣子）、「これからの日本の老人問題」（高橋博子）の報告で第1日目を終了した。

第2日目は、「翁の思想」（山折哲雄）、「中世家族における家父長と隠居」（飯沼賢司）、「江戸時代における老人問題」（大竹秀男）、「日本法における老人観」（橋本宏子）、「農民の隠居制度」（武井正臣）、「リハビリテーションから見た障害老人の『自立』」（二木立）の報告が行われ、これらの諸報告をめぐって様々な議論が展開された。

二日間にわたる報告と討論を通じて「老い」ないし「老人観」について様々な学問分野でかなりの研究蓄積が存在することを痛感した。筆者（清水）が、今大会に出席して得た最大の収穫はこの点につきるといっても過言ではない。

（清水浩昭記）

日本人口学会関東地域部会の発足

日本人口学会関東部会は昭和62年6月神戸大学で開催された同学会の第39回大会において承認され発足し（岡田実理事担当）、第1回研究報告会が昭和62年11月28日（土）午後2時～5時明治大学会館5階にて開催され、非会員を含め32名が出席した。岡田実理事の進行により開会され、畑井義隆会長挨拶のあと、研究発表は岡崎陽一座長（日本大学）のもとで以下の通り行われた。

1. 平均余命の男女差 大塚友美（日本大学人口研究所）
2. 人口高齢化における子供と老人の幸福 河野稠果（厚生省人口問題研究所）

（廣嶋清志記）

国際人口学会「先進国における家族生活の新しい諸形態」セミナー

国際人口学会（IUSSP）のひとつの委員会である「家族人口学とライフサイクルに関する委員会」は1982年設置され、家族人口学の形式人口学の開発にあっていた（委員長 John Bongaarts：オランダ）が、1985年からは家族人口学の実質的な側面に焦点を当てている（委員長 Elza Belquo：ブラジル）。この委員会は本年1月5～7日のセミナー Changing family structures and life courses in LDCs に引き続き、10月6～9日フランス国立人口研究所（INED）との共催で、フランスパリ郊外の Vaucresson 市で標記（New forms of familial life in MDCs）のセミナーを開いた。本研究所から廣嶋清志技官が出席したが、他に米国へ留学中の小島宏技官が spontaneous paper を提出し、出席した。セミナーの内容は下記の通りである。このセミナーのテーマが family structure でなく forms of familial life となっているのは、欧米では離婚や同棲などが増大することによって家族の生活が複雑化し、家族の範囲を設定することが容易ではなくなってきたことを反映している。なお、本セミナーに提出された論文は Oxford 大出版部から本として刊行される予定である。

General Introduction

Jan Trost (Sweden)

Session I : Different forms of Living Alone

Chair : Jacques Commaille (France)

1. The determinants of young people living alone (up to 30 years) Wilfried A. Dumon (Belgium)
2. The determinants of middle aged people living alone : evidence on those aged 30 to 59 in Great Britain John Haskey (United Kingdom)
3. The determinants of living alone after reaching the age of 60 years Harald Hansluka (Austria)

Session II : Different Forms of Cohabitation

Chair : Louis Roussel (France)

4. Fréquence et durée de la cohabitation Patrik Festy (France)
5. Cohabitation by cohorts Erik Manniche (Sweden)
6. Social stratification and unmarried couples Elwood Carlson (USA)

Session III : Monoparental and Reconstituted Families

Chair : Charlotte Höhn (FRG)

7. Les familles monoparentales et reconstituées. Quelles données pour une mesure de leur incidence ? Josiane Duchene (Belgium)
8. Demographic and legal aspects of single-parent and reconstituted families in developed countries Andrew Cherlin (USA) and James McCarthy (USA)
9. Living arrangements of children after the divorce of their parents Karl Schwarz (FRG)

Session IV : Nuclear Families

Chair : Jan Trost (Sweden)

10. Determinants of structural change of nuclear families Anton Kuijsten (Netherlands)
11. L'incidence de l'infécondité par cohorte et durée de mariage France Prioux (France)
12. Family size by social class Rudolf Andorka (Hungary)

Session V : The 3-Generations Family

Chair : Peter Xenos (USA)

13. Old people, their living arrangements and their familial contacts Kiyosi Hiroshima (Japan)
14. Survival of kinship relations in the developed countries, with special attention to the role of these relations in the life of the aged Laszlo Cseh-Szombathy (Hungary)

15. The role of women in multigenerational families Ursula Lehr and
Joachim Wilbers (FRG)

Session VI: Other Household Structures

Chair: Elza Berquo (Brazil)

16. Household composition as a family resource Lea Sharmgar-Handelman
(Israel)
17. Characteristics of the aged in institutions Alice Day (USA)

Overview

Carolotte Hohn (FRG)

Spontaneous papers

1. Preliminaries to the study of the family in Western society H. V. Muhsam (Israel)
2. Correlates of postnuptial coresidence in Japan Hiroshi Kojima (Japan)
(廣嶋清志記)

家族構造と人口高齢化に関する国際シンポジウム

標記のシンポジウム(英語名で International Symposium on Family Structure and Aging)が1987年10月21日から25日まで中国北京市北京大学で開催された。この国際シンポジウムは北京大学人口研究所と英国ケンブリッジ大学 Cambridge Group for the History of Population and Social Structure が共催したもので、北京大学人口研究所は所長の張純元教授、ケンブリッジ・グループは Peter Laslett 教授が代表者であり、プログラム作成の責任者でもあった。このシンポジウムには72名の参加者があったがそのうち28名が中国以外からの出席者であった。著名な出席者として、ミネソタ大学の James Vaupel 教授、フランスの H. LeBras 博士、カナダ統計局次長の Edward Pryor 博士、ケンブリッジ・グループの James E. Smith 博士(米国人)が挙げられよう。中国人口学者若手ナンバーワンの北京大学 曾毅博士が実際の組織者であった。日本からは人口問題研究所の河野稠果所長が国際人口学理事として出席し、国際人口学会を代表して開会式の祝辞を述べた。なお人口問題研究所からは若林敬子地域構造研究室長も出席した。

シンポジウムは10月21日夕方は前夜祭で、実質的には22日から始まった。開会式に始まり、中国の家族サイズと構造のトレンド、家族ライフコースと展望、出生力と家族構造、集合的家族、西欧社会における家族構造とライフコース、人口高齢化の過程、高齢者を支える社会保障制度、人口高齢化のインプリケーションという各議題を討議し、24日夕方実質的シンポジウムは終わった。25日は北京市内関連機関の見学が行われた。

(河野稠果記)

JICA「メキシコ人口活動促進プロジェクト」への協力

国際協力事業団(JICA)は、1984年7月にメキシコ政府と締結した「メキシコ人口活動促進プロジェクト」の年度活動状況を評価し次年度の活動計画を策定するために、年1回の巡回調査団をメキシコに派遣している。本年度は、昭和62年10月26日～11月5日の11日間、大友篤宇都宮大学教授を団長とする5名から成る調査団が派遣され、本研究所からは阿藤誠(人口政策研究部長)が参加した。